

(日本語訳)

ドナルド・J・トランプ大統領、ウラジミール・V・プーチン大統領

核兵器廃絶にむけて取り組んでいるノーベル平和賞受賞団体としてお手紙を書いております。核兵器の危険が極度に高まっている今、私たちは両大統領に、緊張を緩和するための緊急の措置をとり、核軍縮に向けた有意義な交渉を行うよう求めます。

核兵器をめぐる現在の状況は、この数十年間でもっとも危険性の高いものです。恐るべきことに、冷戦という歴史書に追いやられていた危険な考え方、すなわち新たな核拡散や核抑止の拡大を求める過激な主張が、復活してきています。核兵器能力を拡大することは安全への道にはなりません。それは、核兵器が偶発的または意図的に使用される危険性を高めるだけです。唯一の可能な安全保障戦略は、世界を核による破滅の瀬戸際から遠ざけ、軍縮を優先することです。

核兵器禁止条約の締約国は、最近のニューヨークにおける会議で次のように宣言しました。

「長年続いてきた軍縮・不拡散構造は腐食し、軍備管理条約は放棄され、軍事態勢が強化されており、世界の安全保障構造はさらに弱体化している。国際的な緊張が高まり分断が深まる安全保障環境の中で、信頼やコミュニケーションの欠如により、核兵器使用の危険性はさらに高まっている。対話を再建し、信頼と信用を回復し、核軍縮を改めて誓約し、人類全てに破滅的な帰結をもたらす核の瀬戸際政策への回帰を防ぐための緊急の行動が必要である。」

貴両国政府は最近、核兵器のない世界が望ましいことや、核兵器にかかる莫大な費用はよりよい目的に使えることについて、表明されています。非核化に関する言葉には、行動が伴わなければなりません。世界は、破滅の淵を歩き続けるわけにはいかないのです。

広島・長崎の被爆者や世界の核実験被害者たちは、核兵器が人びともたらす恐怖について、その痛ましい記憶を保ち続けてきました。彼らは、その直接の経験から、核兵器がもたらす苦痛をもう誰も味わうことがあってはならないと知っています。

今年6月21日、被爆者のグループがピースボートに乗ってレイキャビクに到着し、ホフディ・ハウスを訪れます。ここは、核軍縮の歴史上もっとも期待できる進展が生まれた場所です。1986年のレーガン大統領とゴルバチョフ書記長のレイキャビクでの首脳会談は、大きな軍備削減への道を開きました。両首脳は、核兵器の廃絶という歴史的な画期を築くわずか手前まで来ていたのです。このとき、政治的意思があれば、乗り越えることができないようにみえる分断をも克服できるということが示されました。お二人は、今その精神を取り戻し、レーガン・ゴルバチョフ両首脳がなしえなかったこと、すなわち、核兵器の全面的廃絶へと進み、これを実現する好機を得ています。

ノーベル平和賞受賞団体として、私たちは、お二人が直接面会して全面的な核兵器廃絶の合意を結ぶよう要請します。

ノルウェー・ノーベル委員会のヨルゲン・ワトネ・フリドネス委員長は、2024年12月のノーベル平和賞授賞式で次のように述べました。

「軍縮を実現するには、勇気と先見の明のある政治的指導者の存在が不可欠です。アメリカ合衆国、ロシア、中国、フランス、イギリス、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮、現在9つの核保有国は、いずれも核軍縮や軍備管理には関心がないように見受けられます。」

今こそ世界に対して、必要とされている勇気と先見の明のある政治的指導力を示すときです。核兵器は、私たちが耐え続けるほかない不可避の自然力ではありません。それは人間の手で作ら

れたものであり、人間の手でなくすことができます。必要なのは、政治的意思だけです。世界でもっとも強大な核兵器保有国の両大統領として、お二人は、核兵器をなくす力を持っています。核兵器が私たちをなくしてしまう前にです。しかし、終末時計が示すように、時間は残されていません。会って、話し合ってください。そして、善のために、核兵器をなくしてください。

最大の緊急性と期待をもって

日本被団協（2024年ノーベル平和賞受賞団体）田中熙巳、田中重光、箕牧智之  
核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN、2017年ノーベル平和賞受賞団体）メリッサ・パーク、川崎哲  
核戦争防止国際医師会議（IPPNW、1985年ノーベル平和賞受賞団体）マイケル・クリスト